

論文

スキーマで説明する日本語表現

——予期スキーマ——

山本 雅子

要旨

意味の把握とは理解するという出来事である。日本語は言語主体の事態解釈態度を露わに反映させる言語であり、言葉の意味を理解するには言語主体の事態解釈態度を理解する必要がある。そして、この理解こそが日本語学習者に運用力をつける。しかし、言葉の意味が反映する事態解釈態度は、言語を自律した記号と捉えるかぎり見えてくることはなく、言語観を転換させ、言語主体を介在させた言語研究によってはじめて知れるものである。本稿では、日本語学習者の運用能力を高めることを目的に母語話者の発話のメカニズムを解明する研究の一環として、多くの日本語表現の意味を動機付ける予期スキーマを提案する。予期スキーマとは、推論プロセスを推し進める Source-Path-Goal スキーマを基盤とし、そこに Force Dynamic スキーマ、参照点構造スキーマが融合したスキーマであり、極めて汎用性の高いスキーマである。

キーワード：言語主体、予期スキーマ、Source-Path-Goal スキーマ、Force Dynamic スキーマ、参照点構造スキーマ

1 はじめに

これまでの日本語教育では、言語を自律した記号体系とみなし、言語形式の意味は言語主体とはなんらかかわりないものであるとする言語観のもとでの言語教育が行われている。し

かし、実際日本語教育に従事していると、母語話者の事態解釈態度を解明して、そのメカニズムを反映した方法で教授しない限り、学習者はその真なる意味を理解し得ないだろうと考えさせられる表現に多々遭遇する。なかでも、どの学習者も習得に明らかに極めて困難をきたす一群の表現の一つに、〈前件が含意する予期値に対して、後件でなんらかの評価をする構文〉がある。本稿ではこの構文を〈予期構文と呼ぶ〉。

例えば、2つの表現「が」と「のに」を比較してみよう。(1)も(2)も「彼」についての事態を述べたものであり、それらの事態だけに着目する限り、両方の文は「英語が話せる」事態と「ロシア語が話せない」事態が逆接で繋がれている文であるという点で同一である。そのため、「が」も「のに」も相反する事態を繋ぐという同じ働きをしているように見えてしまう。

(1) 彼はロシア語は話せるが、英語は話せない。

(2) 彼はロシア語が話せるのに、英語は話せない。

しかしながら実際のところ、「が」と「のに」の差異は、表層は逆接という同一の意味であるかのように見えるものの、実は、発話者の事態解釈態度としては大きな違いを反映しているのである。(1)「が」では可能の成否について判断した2つの事態を単に提示している。一方、(2)「のに」では予期スキーマが作用し、後ろの事態は前の事態が喚起した予期に対する評価となっているのである。したがって、(2)のような予期スキーマを反映する表現形式の意味を明らかにしようとするならば、その説明に言語主体の介入は不可欠であり、主体の事態解釈態度を解明しないかぎり、その説明をしたことにはならないのである。つまり、(1)と(2)の差異については事態解釈の観点からの説明がなされない限り、日本語学習者が両者の違いを真に理解し運用する力を身につけることは困難である。

そこで、本稿では、言語を自律した言語体系と捉える従来の言語観から脱却し、表現形式の意味を言語主体の事態認識の経験パターンの反映と捉え直し、これまでの説明では適切に説明し得ない予期構文を構成する表現を、言語主体を介在させて言語形式の意味を解明する認知言語学のアプローチに拠り考察する。

次節では、まず言語表現の意味を事態解釈態度から探求するとはどういうことかを、認知言語学のアプローチにより説明する。次いで、本稿が問題とする予期構文を動機付ける予期スキーマを提案する。そして、最後に実際に日本語教育の中級レベルで教授される予期構文が如何様にして予期スキーマに動機付けられているかを説明する。

2 概念化とイメージ・スキーマ

「認知言語学のアプローチでは、抽象的な記号の体系として存在するかにみえる日常言語の記号系は、主体から自律して存在するのではなく、人間の認知能力を反映するゲシュタルト的な経験パターンから発現してくるという立場に立っている。」(山梨 2009: 6) 認知意味論では、言語表現の意味は、静的な「概念 (concept)」というよりはむしろダイナミックな性質を前面化した「概念化 (conceptualization)」として捉えられる。このダイナミズムは、概念化が究極的に認知¹⁾プロセスそのものであり、その処理時間を介して明らかになっていくことに依拠する。概念化は、脳内で生じているという意味では内的であるといえるが、同時に、われわれが常に世界のある側面を概念化していることを考え合わせると、むしろ世界と関わりあうための心的領域における手段としてみなされるべきもの²⁾であり、心的経験のあらゆる側面を包含するといえる。概念化には次のようなものがある。

- (1) 斬新で、創出された概念化 (conception)
- (2) 「知的」観念のみならず、感覚経験、運動経験、感情経験
- (3) 身体的文脈、言語的文脈、社会的文脈、文化的文脈の解釈
- (4) 処理時間を介して進展、展開していく概念化 (conception)

(Langacker 2008: 30)

概念化のダイナミックな性質を明確に記述するため、認知言語学ではイメージ能力を重視した記述がなされる。イメージに基づくアプローチは、単純な概念を構成する要素を用いて複雑な構造を表示することを可能にさせ、心的経験の本質をより直接的に反映させることができるのみなされる。

最もよく用いられる記述は、イメージ・スキーマを用いた記述である。イメージ・スキーマとは、日常の身体経験から抽出された、特に視覚、空間、動き、力などに関連してスキーマ化されたパターンであり、ある特定のドメインのなかでこれ以上何にも還元することのできない最少の概念 (minimal concept) を表すスキーマである。基本的に「概念以前」の存在として捉えられるべきものであり、合成と比喩の投射を媒介し、より精緻化されより抽象化された概念を作り出す概念の骨組みである。

言語形式の意味の発現はさまざまなイメージ・スキーマによって動機づけられる人間の認知能力の反映であり、それらのイメージ・スキーマは外部世界との相互作用に基づく身体的な経験を介して構築されている。イメージ・スキーマのうち、日常生活において非常に使用頻度が高く、基本的であり、身体経験に根ざした概念を概念化祖型 (conceptual archetypes)³⁾という。概念化祖型は、人間の初期の発達段階において一貫した概念的なゲシュタルト⁴⁾として理解されている。

次節では、この概念祖型のうち予期構文をさせる動機づけとなる、Source-Path-Goal スキーマ、Force Dynamic スキーマ、参照点構造スキーマを説明し、これらが融合して作用する予期スキーマを提案する。

3 予期スキーマ：Source-Path-Goal スキーマ・Force Dynamic スキーマ・参照点構造スキーマの融合

予期構文を動機付ける予期スキーマは、Source-Path-Goal スキーマと Force Dynamic スキーマと参照点構造スキーマの融合から成る。ここでは順にこれらのスキーマのそれぞれを説明し、最後にそれらが融合して作用する予期スキーマを提案する。

3.1 Source-Path-Goal スキーマ

概念化祖型の一つに、Lakoff and Johnson (1999) が提唱する Source-Path-Goal スキーマがある。Source-Path-Goal スキーマは、移動 (motion) についてわれわれが持っている最も基本的な知識を特徴付けるものであり、図 1 の構造で示される。

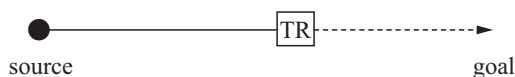


図 1

(Lakoff and Johnson 1999: 33)

Source-Path-Goal スキーマは次のパラメーターによって構成される。

- ・移動するトラジェクター
- ・起点 (出発点)
- ・ゴール (到達点)
- ・ある時点におけるトラジェクターの位置
- ・その時点におけるトラジェクターの方向
- ・トラジェクターの最終的な実際の位置 (それは意図した位置であるかもしれないし、そうでないかもしれない)

また、このスキーマの特質として、経路 (path) が拡張することもあれば縮小したり変形したりすることもあり、またそのままの経路として残ることもあるという意味で、このスキーマはトポジカルであることが挙げられている。また、トラジェクターについて、世界

の中の実物としてあるのではないので想像的な存在物であり、移動して運動の方向に向かって前進しようとするあるものによって残された線状の「痕跡」として概念化されると述べられている。

このスキーマが動機付ける認知作用の多様性は多くの研究で言及されているところである。例えば、山梨（2000）ではこのスキーマによって動機付けられる図一地の前景化、背景化の認知作用が詳説されており、また、山梨（1995: 56）では言語形式「から」が反映するこのスキーマの多様な機能が説明されている。そこでは、図2、図3が示され言語形式「から」は、「認知的観点からみた場合、出発点ないし起点的解釈が自然である。例えば、(3)「丸太から」の場合、認知レベルの意味としてはカヌーが丸太という存在を出発点ないしは起点として、そこから出てきたという解釈が自然である。」としている。また、(4)「から」によってマークされる表現は、「その字義通りの意味からして結果としての事象が派生する〈起点〉（あるいは〈源泉〉）としての解釈が前面にでている」と説明されている。

(3) 丸太からカヌーを作る (山梨 1995: 55)

(4) あまりの空腹から道に倒れてしまった。 (山梨 1995: 53)

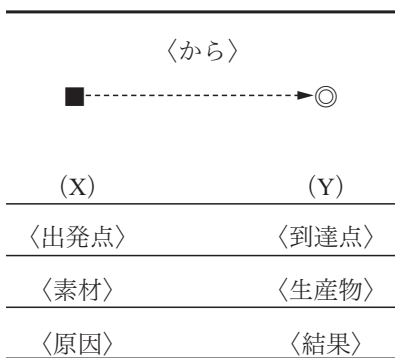


図2

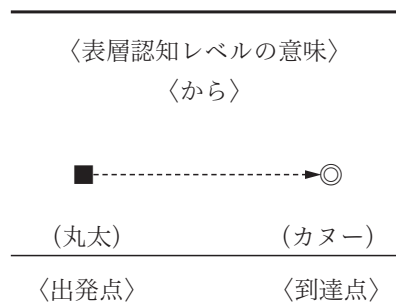


図3

(山梨 1995: 56)

さらに、Source-Path-Goal スキーマは、もともとは物理的空間における移動プロセスの表現化を動機づけるスキーマであるが、抽象度を上げて概念的空間における推論プロセスを表現することも動機づけることを可能にするスキーマであることが図4で示されている。予期構文では、Source-Path-Goal スキーマは「概念的空間における推論プロセスを表現すること」を動機付けるスキーマとして作用する。

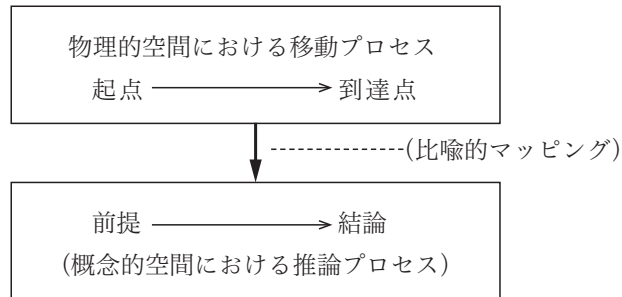


図 4

(山梨 2004: 28)

3.2 Force Dynamics スキーマ

Leonard Talmy (2001) は言語学的観点から “force dynamics” について研究を行い、概念システムにおける一連の力構造を Force Dynamics スキーマによって明らかにしている。Force Dynamics スキーマとは人間の基本的行動（押す、引く、持ち上げる、歩く、立つ、座る、横になる、ジャンプする、投げる等々）の力動範囲（force dynamic dimension）を表すものである。Force Dynamics スキーマのパラメーターは以下のようなものである。

- ・力を加えるもの (An Exerter of Force)
- ・力を備えるもの (An Object of Force)
- ・力 (A Force)
- ・力の道具 (An instrument of Force)
- ・結果 (A Result)

Eve Sweetser (1990) は、Force Dynamics スキーマを、力の種類から 3 つに分類している。

- (1) 物理的力 (Physical Forces)
 - (例) “The wind blew her over.” “The wave knocked me off my feet.”
- (2) 社会力学的力 (Sociophysical Forces)
 - (例) “Paul must get to a job, or his wife will leave.” “You may now kiss the bride.”
- (3) 認識力的力 (Epistemic Forces)
 - (例) “Paul must have gotten a job, or else he could be buying that new car.”

「概念的空間における推論プロセスを表現すること」を動機付ける Source-Path-Goal スキーマを基盤とする予期スキーマにおいて、Force Dynamics スキーマは Path でのトラジェクター

の移動を推し進める「力」として作用する。したがって、予期スキーマでは、(1) 物理的力というよりは、(2) 社会力学的力および(3) 認識力的力という力として作用する。

3.3 参照点構造スキーマ

「ある事物の概念を想起して、それを手がかりにして別の事物との心的接触を果たし概念化する」人間の基本的な認知能力を「参照点」能力とよぶ (Langacker 1993)。山梨 (2000: 91) では、参照点構造を図5に示し、以下のように説明している。

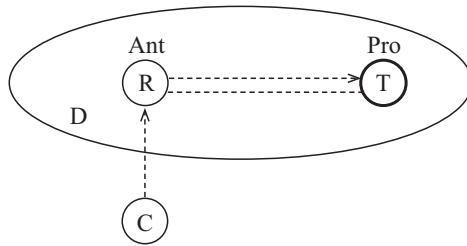


図5

(山梨 2000: 91)

図5の参照点は先行詞 (Ant (antecedent)), ターゲットは代名詞 (Pro (pronoun)) に対応し、両者を結ぶ点線は、先行詞と代名詞が同一指示の関係にあることを示している。また、ドミニオン (D (dominion)) の領域は、参照点としての先行詞によって起動されるターゲットの候補の探索療育を示している。この参照点と参照点によって起動されるターゲットの候補の集合は、図6に示される。

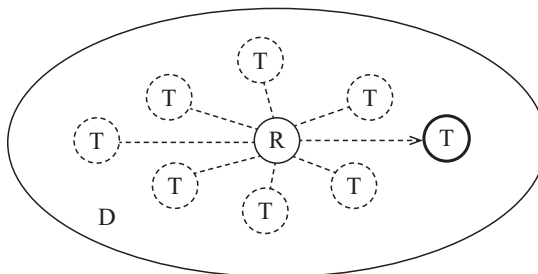


図6

(山梨 2000: 92)

図6の破線のサークルで囲まれているターゲットは、先行詞と同一指示の関係にはないが、参照点としての先行詞によって起動されるターゲットの候補に相当する。参照点とターゲットの認知プロセスは、先行詞が参照点としてターゲットの候補の集合 (i.e. ドミニオン) を起動し、このドミニオンの探索領域のなかに先行詞と同一指示詞的な代名詞のターゲットが同定されるというものである。予期構文では、ターゲットの同定は Source-Path-Goal スキーマの到達点として作用する。

3.4 予期スキーマ

予期構文を動機づける予期スキーマは、概念的空間における推論プロセスを動機づける Source-Path-Goal スキーマを基盤とする。予期を誘発する事態認知が予期の開始地点である Source となり、思考経路である Path を経由して予期の帰結となる Goal に到達する。移動するトラジェクターは発話者の予期知識である。ベクトルは一方向であり、Source から Goal へと向かう。そして、この Source から Goal へと向かう Path でのトラジェクターの移動を押し進めるのが Force Dynamics スキーマである。推論プロセスでの Force は、当然、物理的力ではなく、社会力学的力や認識力の力であり、両者のどちらか、または両方が力となって予期知識を到達点へと導く。そして、最後に、Goal である帰結の決定が参照点構造スキーマによって動機づけられる。Source である予期の開始地点における知覚事態が参照点となってターゲットの候補の集合であるドミニオンが起動される。そして、Force Dynamics スキーマに動機付けられて移動したトラジェクターがドミニオンのなかのターゲットを同定するのである。予期知識と同一指示的なターゲットが同定されるケースもあれば、他方、予期内容と反同一指示的なターゲットが同定されるケースもある。

予期構文を動機付ける予期スキーマをまとめると次のようになる。

〈予期スキーマ〉

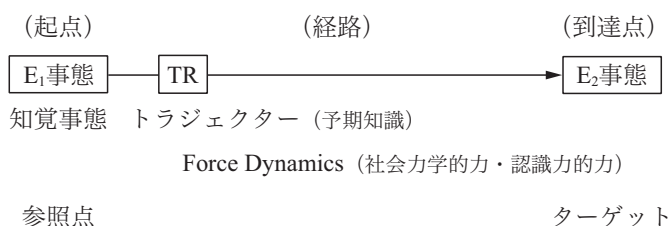


図7

(パラメーター)

- ・ 基盤となる認識作用を動機付けるスキーマ：Source-Path-Goal (起点—経路—到達点) スキーマ
 - ・ 移動するトラジェクター (予期内容)
 - ・ 起点 (予期を誘発する知覚事態)
 - ・ 経路 (予期過程)
 - ・ 到達点 (現実における予期の適否)
- ・ 経路での移動を動機付けるスキーマ：Force Dynamics スキーマ
 - ・ 力を加えるもの (予期する意図)
 - ・ 力を備えるもの (予期内容)
 - ・ 予期を進展させる力 (社会的常識力, 話者の認識力)
 - ・ 結果 (現実における予期の適否)
- ・ 到達点での確定を動機付けるスキーマ：参照点構造スキーマ
 - ・ 参照点 (知覚事態)
 - ・ ターゲット (参照点を手掛かりにした予期の帰結)

4 「予期スキーマ」を反映する表現

予期スキーマは実際にはどのようにして予期構文を動機づけているのだろうか。ここでは、予期構文を形成するいくつかの表現を採り上げ、その表現の意味が Source-Path-Goal スキーマ, Force Dynamics スキーマ, 参照点構造スキーマの融合からどのようにして創発されるかを説明する。

4.1 「起点」と「到達点」の関係性をプロファイル

予期スキーマにはさまざまなパラメーターがあり、予期構文を構成するさまざまな表現はそれぞれに異なったパラメーターをプロファイルする。ここでは、基盤となる Source-Path-Goal スキーマの「起点」と「到達点」の関係性をプロファイルする表現について、そこの予期スキーマの作用を考える。

4.1.1 「E₁のにE₂」

まず、冒頭に挙げた「のに」表現について考える。

(5) こんなに雨が降っているのに, あの子は傘をさしていない。

E₁

E₂

(5) の発話は、例えば次のような場面においてである。喫茶店でコーヒーを飲んでいた主体

Force Dynamics スキーマの力は話者の経験をつくっている社会的慣習からくる知識である。そして、Source-Path-Goal スキーマの起点を前提とした参照点構造スキーマの作用に抛り、前提を参照点としてターゲット事態「英語が話せない」が特定されるのである。ターゲットが予期に反していると主体が認識していることを「のに」が反映している。図9に示す。

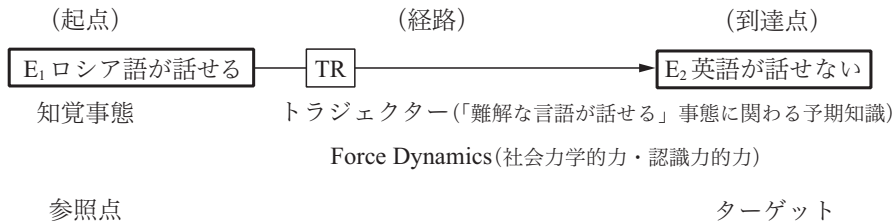


図9

4.1.2 「Xと言ってもY」

「Xと言ってもY」表現は、『中級の日本語』(The Japan Times 2008: 171)では次のように説明されて、例文が挙げられている。

Xと言ってもY = 'It's true that X, but Y; Although I said X, Y'

と言っても follow a plain forms, but a copula だ is generally omitted. In this expression, Y is given to qualify X.

- (6) クリスマスと言っても、日本にはクリスチャンはあまりいません。
(Although I said Christmas, there are very few Christians in Japan.)
- (7) 寒いと言っても、湖が凍ることはありません。
(Although I said it's cold, the lake never freeze.)

上の説明では 'Y is given to qualify X.' とあるが、qualifyの意味が不明瞭であり、学習者には分かりにくい。例文も後付け的な訳としては理解できるだろうが、この訳文を理解したからと言って「Xと言ってもY」の文を作り出すのは難しいだろう。これを予期スキーマで説明すると次のようになる。(6)の基盤として作用するのは、「クリスマスを祝う」事態が予期させる「クリスマスを祝う」事態に関係するさまざまな事柄である。予期を進めるのは、話者の社会的観念であり、ターゲットの一つに「クリスチャンが多くいる」という事柄があり、この場面では、主体はこのターゲットを否定している。特定されたターゲットが予期に

反したものであることを「のに」が表現している。図10に示す。

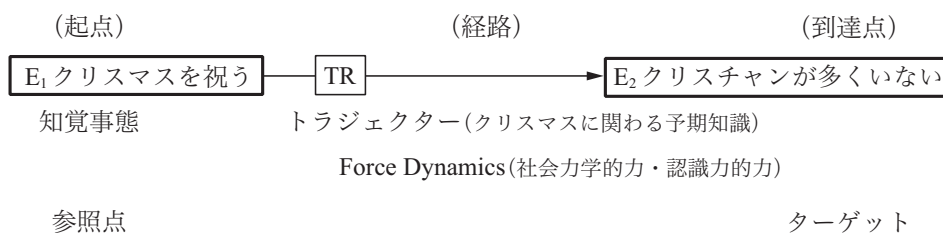


図10

(7) で基盤として作用するのは、「寒い」事態が予期させる寒さの程度を予期する推論プロセスを動機づけるスキーマである。「寒い」ことを前提にした程度を予期するプロセスの帰結には、「雪が降る」、「湖が凍る」「コートを着る」等々さまざまなターゲットがある。ここでは、ターゲットの一つである「湖が凍る」事態を否定する態度が表されている。図11に示す。

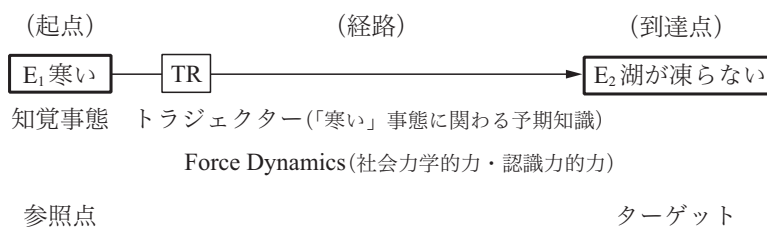


図11

このように、「Xと言ってもY」は、Xで提示した話題について、普通一般に聞き手が予期する事項が成立しないことを説明する構文である。

4.2 「経路」をプロファイル

4.1で採り上げた表現は、予期スキーマの基盤をなす Source-Path-Goal スキーマの「起点」と「到達点」の関係性がプロファイルされていた。しかし、予期スキーマでは「経路」がプロファイルされることもある。ここでは経路がプロファイルされる表現である「なかなか〜ない」を採り上げる。

(8) 漢字がなかなか覚えられなくて、困っています。

(It's terrible because it takes a long time to memorize kanji.)

(8) を動機付ける予期スキーマは次のように説明される。まず「熱心に漢字を勉強する」という知覚事態が推論プロセスを推し進める Source-Path-Goal スキーマの起動を誘発する。「熱心に漢字を勉強する」事態が起点であり、トラジェクターは〈熱心に勉強をすれば当然出るはずの成果〉についての予期知識であり、予期の経路を推し進める Force Dynamics スキーマの力は話者の経験をつくっている社会的慣習からくる知識である。そして、Source-Path-Goal スキーマの起点を前提とした参照点構造スキーマの作用に抛り、前提を参照点としてターゲットの一つである「漢字が覚えられない」事態が否定して特定されているのである。ここでは、予期スキーマの経路がプロファイルされ、「なかなか～ない」に反映されている。ターゲットが予期に反していると主体が認識していることを「のに」が反映しているのは、4.1で述べた「のに」のはたらきと同様である。図12に示す。

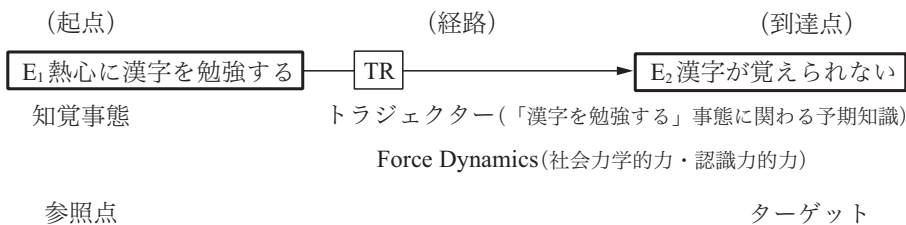


図12

4.3 予期スキーマとパラメーターのプロファイル

予期スキーマには、3.4で示したように実に多様なパラメーターが作用する。前節では、「のに」「と言っても」が起点と到達点の関係性をプロファイルすることを説明した。「のに」の意味は、予期スキーマの起点と到達点の関係が言語主体の予期知識に反するものであることをプロファイルするものであり、「と言っても」は、起点と到達点の関係が聞き手も含めた一般常識に反するものであることをプロファイルするものである。一方、「なかなか～ない」が反映するプロファイルは到達点と経路であり、到達点への到達の困難さを意味している。

このような、予期スキーマにおけるパラメーターのプロファイルを反映する言語表現は日本語教育の中級レベル教材に新出表現として多出する。例えば、『中級の日本語』(前出)のなかには、本稿で取り上げた表現の他にも、「～ものの」「～すれば～ほど」「～ても」「やっ

ぱり」「さすが」「それにしても」「せっかく」「くせに」等々、実に多くの表現が散見される。したがって、こういった表現の教授には、表現のベースに存在する予期スキーマと、そこでプロファイルされるパラメーターとの関係を、まずは教授する者がしっかりと理解し、それを学習者に分かりやすく工夫した教え方で理解させるという手順が踏まれることが必要であろう。

5 おわりに

日本語がとりわけ話者の視点を反映させて表現する言語であることは、言語研究の場では既に多くの研究で言及されているところである。にもかかわらず、言語教育の場では、その特性を追求することなく、相変わらずも、言語を自律した記号と捉えてその意味を求め、それを教育している傾向が強い。安易に他言語に置き換えてみたり、その表現が現れている文の意味を後付け的に説明し、その一部を該当表現の意味とみなすなどである。言語表現についてのこういった姿勢では、学習者は運用能力を高めることは困難である。母語話者の発話のメカニズムを解明し、それを言語教育に応用し、学習者の運用能力を高めることこそが、生産性の高い言語教育である。本稿は学習者の運用能力の向上を目的とし、日本語表現によく現れる予期スキーマを説明した。推論プロセスを推し進める Source-Path-Goal スキーマを基盤とする予期スキーマは、プロファイルされるパラメーターの差異が汎用性を生み出す。汎用性の高さの実例の提示を、今後の早急の課題としたい。

注

- 1) ここでいう「認知」は、「知覚や身体経験に根ざしており、他の能力から独立しているのではない。社会的な相互作用によって、心は刺激を受け発達していくため、習得された能力や知識は、社会文化的な環境にきわめて順応していく。」(Langacker 2008: 30)。また、「認知」は「メンタルなオペレーションまたは構造の、どんな種類のものについても用いられる」(Lakoff 2004: 23)
- 2) 「人間が起こす出来事であれ、語や文であれ、意味とはつねに、ある人物ないし共同体にとっての意味である。語そのものは意味を持たない。語が意味を持つのは、語を用いて何ごとかを意味しようとする人々にとってだけである。要するに、言葉の意味は、ある個人もしくは共同体が、その共同体によってあることを意味するために、言葉を使用することに基づいている。」(Jhonson 1987: 177)
- 3) 概念化祖型について、Langacker は次のように説明している。‘These are experientially grounded concepts so frequent and fundamental in our everyday life that the label archetype does not seem inappropriate. Here are some examples: a physical object, an object in a location, an object moving

through space, the human body, the human face, a whole and its parts, a physical container and its contents, seeing something, holding something, handing something to someone, exerting force to effect a desired change, a face-to-face social encounter.’ (Langacker 2008: 33)

- 4) ゲシュタルト心理学の中心的概念であるゲシュタルト (Gestalt) は、全体が部分の総和からは単純に予測できない有機的な構成体として規定される。「外部世界の知覚には、主体の主観的な認知プロセスがかかっている。主観的な認知プロセスのなかでも、とくにゲシュタルト知覚にかかわる認知プロセスは、形式と意味の関係から成る日常言語の記号系のメカニズムを明らかにしていく際に重要な役割をになう。この種の認知プロセスは、心理学の分野（とくにゲシュタルト心理学の分野）において明らかにされてきた認知プロセスである。」(山梨 2009: 13)

出典

三浦昭. 2008. 『中級の日本語 [改訂版]』 The Japan Times.

引用・参考文献

Johnson, Mark. 1987. *The Body in the Mind*. The University of Chicago Press.

Lakoff, George and Johnson, Mark. 1999. *Philosophy in the Flesh*. Basic Books.

Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar*. Oxford University Press.

Sweetser, Eve. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge University Press.

Talmy, Leonard. 2001. *Toward a Cognitive Semantics. vol. 1*. The MIT Press.

山梨正明. 1995. 『認知文法論』 ひつじ書房.

———. 2000. 『認知原理』 くろしお出版.

———. 2004. 『ことばの認知空間』 大修館書店.

———. 2009. 『認知構文論』 大修館書店.